三國一夜物語

五

へ 13
3021
5

門へ13
3021
5

富士浅間三國一夜物語巻之五

東都　曲亭馬琴著編

第六編　阿弥陀寺の法會ハ照行浪路を春恋夏富士太郎夫婦ハ殊さらふ路をのぞき。旭やうやく海面を登るころ。家ハ久ク着て見るハ。門ハ引立るまゝ。裡ハ起出し氣色もなけれバ。やゝ戸を引明て入るハ。浅ましく。毋ハいとく柱ハ縛へられ。そのやうハ長き刀を脇ゝ。夫男血を吐きて殪れてあり。富士太郎も櫻子も。只ハ呆れくまゞ毋の索をときさゝぐ。勅りて故を問ハ。三雲も子どもハ。ほゞ恙なきハ。安堵て物ごろ

昭和九年七月一四日購求

疇昔山身夫婦を待こゝて。甲夜のかど門ゐ立つゝ
ゐまど。夷の刻過るころまでも。来ずゝるすみけまバ。勝間
村のあるまでも。ゆきて見だやとおもひしゝ跡ゐ守る人も
あらざまバ。そまもところゐ立ちぞ。うさゐ思ひわぶるゐ。
いも寐らまどして待とまろやどゐ。やゝ丑三のころゐ至りて
門の戸やゝと敲くゐぞ。をいと回答て鎖を外し。戸をさと
引明こまバ。山身等が帰りしゐあらで。この男つと裡ゐ入る
なり。吾身の胸まろを掴む。右のまゐ刀を拔もちてゐ
やよ老女よ。驚くとなられ。つまゝ盗人の大将軍ども
脱まいぞ。人ゐ告んと。せバ。夷狄の国ゐあるとゐ胸ゐ宛る

人とうまとべー。音なせそとのひゝ。鈎索もて縛つけまる
力を閃かしてゐやう。汝等が墨江ゐあるとき物を
うゝざろーとゝを。よゝ聞て来つまバ。そゐ稼り住てもゐ
財ハ秘おきけんやゝ藏ゆる所をおしえよゐハ呼
吸ともべーと。いゝ毒懲ゆゞ吾身つゝぐおりゐめ。そハ
隣も遠けまバ。ありて助くゝ人もあらじ。あるとゝゐ
身ひて可惜命をおらゝゐぞ。富士太郎等が帰り来ま
さる悔歎くらる。よゝや些の黄金を得さるとも
財ハまゝ聚るときもあるべーと深念しゝ。衣服金銭の
在どころをおゝ人て。ちぐゝ殺せゝぐ彼あちもうゝ

裂めてのゝ。さても今夜へ幸うきことよ。甲夜より遠近を走り巡りしどさるる職物もなくそゝとそとおもひ設けて来しものを。この元拳ゐも握り足らぬかどの金を得しうめまりは痩せて物かしうるしぞ。酒ゆゝ飲んとのゝ。吾身をさえて酒ハ一度くも嗜たべどぞ。殊きふこのごろ喪ゐともつゝそひ見バ。くるものハ露だうもなーとのゝよ。

らば餅ゐうとも飯ゐうとも食せよとのゝ餅ハ鄙ゐ外より貰ゐる萩の花餅の作り。そゝゆゞとふゐるぞ。彼所の糊ゐる置の中ゐと教ゐの見バ。盗人ゆゞて卯原が饋りゐる餅を取出て。只飯がごとく三ッ四ッも食べしゐ。忽地一声噫と

叫び。血を吐て仆れつるが。彼餅ゐハ毒をや入れけん。見るく顔の色もゝ〻そ。終ゐ縛きまーうしと語るゐ。夫婦大きふ驚きあやしゝ。母が僥倖ゐして脱れるをよろこびく。舌を振ひて怕れしが。富士太郎掌を丁とうち。彼卯原が日来信〻しく欺待せしハ。吾儕を害せんとの謀ゐありつるぞや。れゐそ思ひ合ゝれバ。彼きのゝ餅を饋り来ゐるゝ誤りてとり落しゝる体ゐ見せ。まづ一ッの餅を門ゐる犬ゐ食せゝ。疑れどゝの計ゐて。その一ッゐハ毒を入れで残る餅を食ふゝ。立地ゐ死をべきを天地神明ゝれを

三雲を
刼して
檀ふ餅を
倫児
啖ふ

監さとの賊ハ食せしあて。卯原が伎倆を發覚し
あり。嗚呼危ひかな危きかな。と叫び賊を引起せば
四肢ハ紫色ハ腫こそう。眼を瞪。舌を吐き顚ろ
鳩尾まで。血ハ塗まて死しるが。その相貌なハと
ちん。見し人のごとくなるバ。母ハ對ひて言をかう。この
賊が面を見まバ。彼五四郎ハ肖う。母ハ
さもおがさぞやと問ハ。三雲もちろめて心づきげハも
ハ身がいとごとく。五四郎ハ露ばかり。彼ハ右の髪の
中ハ。さてかるる痕あり。と云へ〳〵ハ富士太郎
がて髪の毛を撥こき見まバ。一寸ばかりの痕あり。

まがうもあらぬ五四郎なり。り息絶をする
ちらバ小雪がゆくをを責問べきハ。綺断こそバ
せんこそなし。と悔むを聞て母ハまこその仇讐
をも復しまが。女児が事ハ夢ハ夢ハ知らしー
こと〳〵ちつ。懐舊の涙堰あへぬ。櫻子まこと
こうこうハ。母と夫の心根を。おもひこそべてこそハ
あやなく袖をぬらしけり。富士太郎とを見て。
母御さのこの歎きたまひをまこよろこぶべきこと
あるを。昔家ハ久る道をぶ。合法が術術
うく闇魔王の奚驗あり。焼失しとおもひつる

笙の秘書もうばひ入れぬ。そろ忙はしけれど詳に言さぐるに櫻子が問ひしうるに事後まで彼卯原を。ひとり逃さじ。腑を嚥まうひあげど。くまでんとそれもあるを。外方へ走り出阿部野を望ていそぎしが。たちまち忽地ありよ事。五四郎が変死のとたちまち村長が変えぬうるが鮮をひとくふ。いとひがしうんと心つき。中途よりまが村長が家へ到りて。たちまちのゆゑを告直ぐ走り去らんとするを。村長呼びとめて。とのあと輕きに似てなるなぞ狂うぞ。いざとともに知縣の第宅へまかりうるへとりよ固辞ぐ。うちつきて彼

處に到り。備由を訴ーる。小吏知縣の命を稟富士太郎をを將て浅沢ふいゆき。五四郎が死骸を展檢あて。縁故を問ひ兇などせしかどふ。やくその曛昏ゆ果て。小吏ハ帰りけり。富士太郎ハいよく焦燥てあるべの阿辺野へ走り行きーるど。卯原ハとく変ちけん。いちもなく逃亡うる。ハ漏しーゆる朽おーきよとひとうどちの家ゆそ卯原がをを問ゆそ人答へて。彼婆何ゆりけん。俄頃ゆ家賊を船ゆ積のぐーて出去りー人亭午のとうーーを語るゆ。きてハ逆ゆ逃隔ーんとおりん絶えゆるーーく家ゆ帰りて。卯原が逃去りーーとを

告げ。母も櫻子もいと遺憾ぞおがへける。抑彼五四郎ハ原無頼の光棍ゆゑ。諸國を經廻り人の女児を拐掣などせしが。近頃浪速ゑ来り。專賊せして人を屠ぬ。ちるゑ天網恢々として疎ゑして漏さず。彼不意富士が家ゑ入りまづ毒殺して卯原が伎倆を顕せり。こゝて富士太郎ハその夜櫻子ゑも相語ひ。母ゑ對ひて言を出ず。いぬる二月廿五日。こゝ父淺間ゑ擊たまひしより。復讐のゐ片時も忘る隙をしとゝ。そのゝちハいまゞ免許を蒙らざりしを黙止し。又まゝへ移住ス。忌ども果てとゝおひつるゑ。得ぐしを

せし樂書を。こゝゑ見バ。復讐ハ。猶豫ぐしまる彼樂書をゑ洛ゑ獻らば。父の過ちをも許ゆひて。召環さまんゐハ相違もゆらざる君ゑ仕へて身を拔ゑして讐人を索ねぐし。粤ゑ大内左京權大夫良義弘ねしハ去年の冬山名氏清誅罰の恩賞として。室町殿山名が舊領和泉紀伊ゑ增。寺へゆをして。義弘近曽泉州堺の城ゑ在とぞとの人へ上のゐおがえを愛し威徳管領ゑも超ゑる。嚮ゑこゝ父を猫間川の陣中へ招きゆひつる縁ゑしもゐ見バ明日堺へ赴

きて義弘ぬしに縁由を告て筐の秘書を須進らせ又母のうへをも頼まえよろづ後やすくして讐人を窺べうおもひさだむるなりといへば。三雲聞て。復讐のうへかくぞあるべき。さはれど櫻子孕てはや月もかさなりぬれば。せめて秋のはじめまでは爰にありて産をも見果させてこそ。あながちに旅だちたまへかしといふに。富士太郎答て母の命推辞むにあらねど。子の故をもて親のうへには換がたし。縦その赤子生れて。父をしらずとも母ましませば養育なさへ。櫻子もひとへにつよかるべしこれのうへ許しませといひておもひ定める氣色な

れば三雲もさのうへはとてふたゝび留ず。富士太郎は次の日。彼樂書を懐にして堺へまかり。大内家の老臣に就て。縁由を言せしかば。義弘聴て對面ありけり。富士太郎をはじめ委細にかたらひ人を演説して。樂書を稼け進らするに。義弘只管感嘆あり。この秘書のうへを洛へ許するをまからば。所領元のごとく返しまゐらすべき條仔細あらじといへども。いまだ父の讐を報いねば。仕官ねがはしからず。かつまた道理にあはず。なほ是其許が志を尽をその日までは。ひそかにこれを預りおき。言の序あらば。室町殿へも言をべし。又老母妻との

事いよきに扶持もぐけるバ。聊もおろひぐまなく旅だちゆくらしと懇切言葉にめうつまて供えらるへバ。富士太郎ハ恩澤身にあまれるよしと謝て城を退出。浅沢に入て。三雲櫻子にそのもを物がたりいふやう。大國の主ハ物を容るゝ度ひろし。吾身ハ勿論。父も親しく。大内家にあるねど。公明にして親疎をきらはるゝのどとーと稱賛し。また櫻子に對して。吾身今より外にありて。讐人を寛とす。一身のうへ却て易く。又也身が家に留て。母に仕へ。児を養ふことハ甚難し。去

ばその赤子生れ出て健に生育ともうらぶぞしも愛に溺れて。母のうとを等閑に去のひとと教論し。又母に言をゆう。月俸ハ。大内家より賜るべけれバ。也とろ安くおぼしうへ。但しそれがし旅にありて。いくその年月を経るとも。こえて音耗ハいまをべうぞ。とゝ人ハ讐人に漏さじとおもふゆゑなり。只いつまでも音耗をくハ。富士太郎ハ病とゝもなくて。仇を索巡よと云うせの人らしといひ。訖り。俄項に行装を整へ。次の日の彼誰時萬里の旅路に赴けバ。親子妹夫の恩愛も。豫てぞおもひ諦ひきど。今さら餘波

おしまれて。泣ドとまれバあやふくふ。たゝふの落る涙の間より。三雲いと心かそげふ。やよ富士太郎。おん身をを立出てそのゆくゝ東ゝ西ゝいとあがつゝ。と陆ゞ。富士太郎答て。赤松の家臣室積平馬とゝふ。照行ふ親しけれバ。讐人い定めて播州ふとそ。匿居るべけれ。よりてまづ播州を索巡りゝ其所ふて環會ぞ。國く残りなく編歴したるべし。唯ねがゝくハゝぶ母よく自愛し。照行が首を引提て。聽て帰るをまつ也。と言葉〳〵ねんごろ。既ふまろ出んとまろを。櫻子夫の袖を引て。世の常言ふ左孕ふ男子をとゝ傳へたる。胎内の子ゝ男子ふてあれゝゝバ。何と名づけたらんとゝバ。富士太郎ぞし沈吟し。ゝれハ東ふ生れ。彼い西ふ生る。比叡を都の富士と久バ。叡太郎とも呼び也。ゝ女子をゝバ母ふ問て名づけゝへしと回答して。草鞋穿しゝ立出つ三歩五歩走らせ去るとき。裡ふ母と櫻子がゝゝと泣音ハ耳ゝも。胷を衝拔ごとくなれど。ところよくくてるハゝと。おゝ久して足たやく。播磨路さして旅ぞらね。不題浅間左衛門照行ハ。往ふ猫間川の陣中ふて。已ふ富士右門を狙撃やと思ひしゝバ。まづ室積平馬ふ

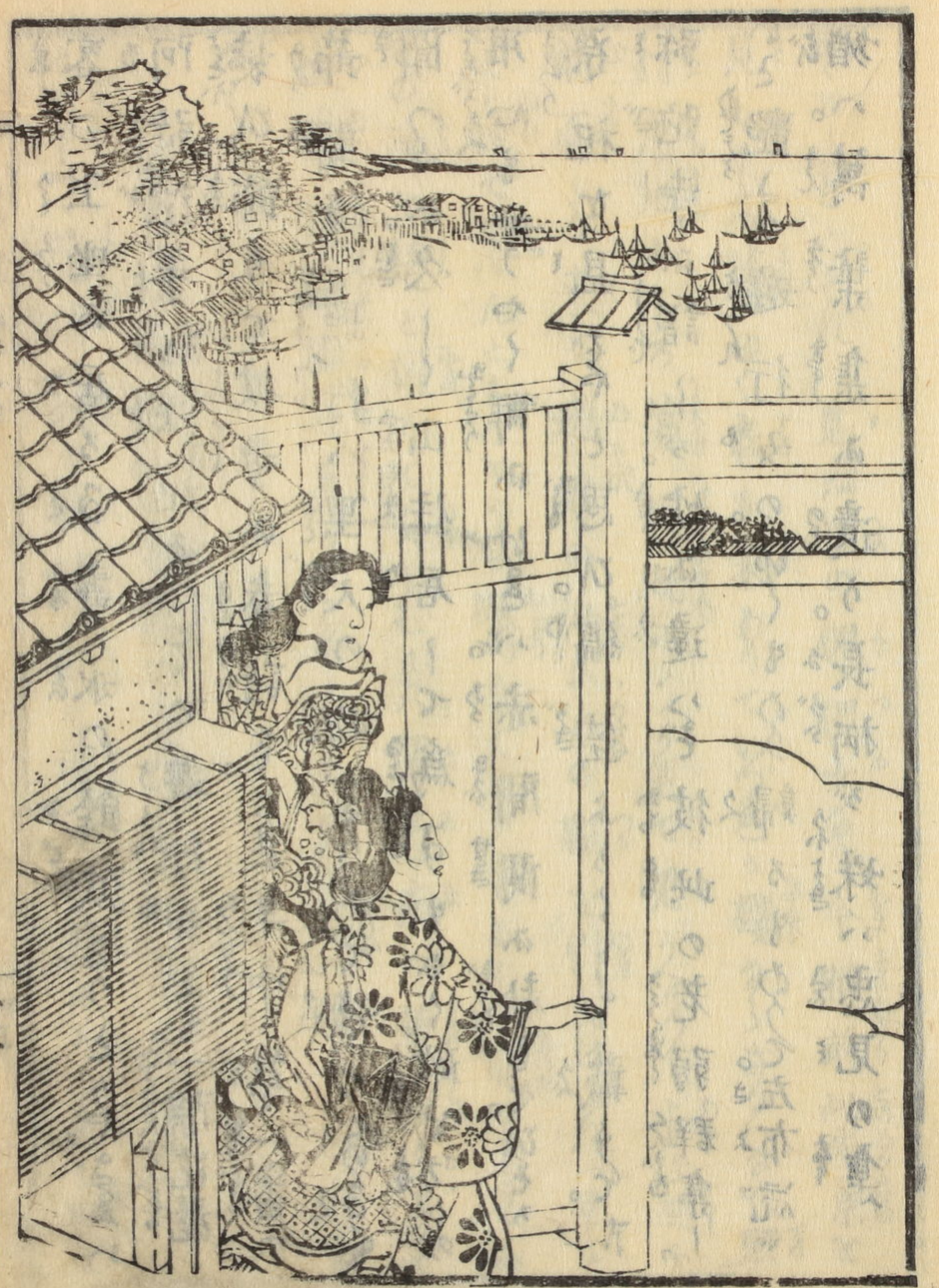
おもふ。昔を考へるに平馬もまこと心よろこぶものなるべし。
是を宜しとして。よろづ示し合せて立つる是しかるに照行
いよ〳〵心定まり。その夜右門を火攻し。村主兵助をも撃
ちしが。終に高峯の大鼓を奪ひ得ず。浪速の浦
より船出して。播州に逃下り。高砂に立潜びてありつるに。
いく程もなく赤松義則。猫間川の陣を引ひて帰
城ありしに。室積平馬も主に従ひて。播州に立ぬ。
浅間照行に告ていふ。近曽浪速にて風声を変ず。
富士太郎既に復讐の免許を蒙りしとかや。彼も此
身がつとと親きをよく考へば。うらやましきこの州を索ぬべし。

志うるを虚〳〵とこそあらんハ謀の拙きに似たり。吾おもふに
長門國赤間関の西北に。西山中とかや里あり。この地方
西ハ小串。河柵の郷の外。渺〳〵たる蒼海にして東ハ又
今尾吉田の郷を隔て。中に一條の大河あり。まさに街
道を去ること遠くして。竟の隠家なり。幸ひ彼地に豫て
ちなる人もあるべに。身がうを頼を遣べし。まづ彼首に一
年あまりも立潜て富士太郎をかりるし。そのうちまく〳〵帰り
あせよとのべば。照行大によろこびて。聽て平馬が書簡を
請受室の津より便船して。遠く長州へぞおもむきける。
浩所に四月の上浣卯原計を爲損じて。播州へ逃

来りしに。平馬ハ伯母をもとめ第宅の裡にふるく匿
おきて。人にあらはさるゝなりしかども。富士太郎ハ回
國の行者に打扮笠をふかくして播磨路を経歴し。
次の年の春の季までも。ひとり国を索ねしに。浅間ハ
さらなり。母の卯原が往方さへさゞらねば。今ハそゝひ
たえ遂に中國を経て四國にとゝろ筑紫のたて
までも普く索ね廻りぬる月日も路も遥なる。然る
程に照行ハ長門の西山中にふるく匿まてありしまゝ
その年も暮て。春も三月の下旬にぞなりぬ。奥に赤
間下関に。阿弥陀寺とゝふ蘭若ありけり。この寺に

安徳天皇の影像を安置し。平家一族の遺物を
藏むとゝて毎年の三月廿四日。安徳天皇の祭祀あ
りて。平氏の爲に法を修をとゝまるいち。文治元年
三月廿四日。天皇西海に沈没ゝるに。平家の諸將陣
没せし日なりとて。この日居多の鬼蟹ありて。
赤間関にあらはるゝなりとぞ。ゝるに彼関の遊行女ハ。
その皇祖平家の残黨なり。某の媛君。何がしの女房と
呼ばるゝ。やゝとゝるき御達の落魄て。便なきまゝに。浮身の
宿の憂にあぐこそ。この津の遊君とゝるゝもの。
今ハ絶せぬ。ゝのころまでぞ。五重衣に緋袴を着て

浪路歌を詠じて路の照行を誘ふ



客の上坐に居るゆ壽永の餘波ありとやさまハ
阿弥陀寺の法祀にそのの遊行女ども一際花麗
装ひ飾りて彼寺に参詣をとゞ年中第一番の
節聞ゆ。照行ハ里人の物ぐりにて豫てこのゆを
聞つゝ久しく山住居して爲ゆもなく敵を防ぐの
用心もゆうやく懈にけきバ赤間関に赴きてひそろ
祭祀を見だやと思ひ編笠ふかくうち戴りて花
弥陀寺に詣しが供に違ひぞ彼此の老弱群集し
いと艶なる遊行女のゆくもあり帰るもあり左布流が
媚ハ。萬葉集に遺り。長柄が妹ハ忠見の集

そめゝとそれハ見ぬ世の偶偶女ゆ。今眼前此光景を
見るゆハ暮ゆく春も栄ありて。ゆゞまゝ櫻ゆゝざろくなく照
行忽地にゆゝ蕩魂既にうゝまて。刀ゝくく歩む間に
前面より来る遊君の袖に刀の鞘を引かけれバ。ふ
ゝと挫て落んとするをうち驚きてゆとゞめしが慌しく
その袖を楚と握りて引とゞむるハ。番奇南の薫發とゝひて
庾嶺雪融梅吐香とあやしまるれど女ハ騒ぐ氣しきも
なくて
たゞ赤くぬ面影山の春霞ひくゝひゝめぐゝ
と听ゝく。莞然と咲る風情ハ鳥も驚て松蘿に入り魚も畏て

荷花ハ沈むなりうるまびけゝの西施ハとまるうと讃て少し引さがりゝ。
従ひ来る老三板ハその名を問バ。こゝハ赤間関の長が家ハ名
たゝる浪路の君ハそけるゝ。と答してこゝりしゝ。照行ハたゝりしその方を
目送りて。行もやゝぎありつるゝ。彼女子他人の妻なゝゝ。ハ憂とも逢
ゝ難ゝふんゝゝゝ色を衒情を賈ふ遊行女なゝを。峯の赤ゝ雲
花と見なゝ。手を空しゝ已なんハ朽をし。さゝゝ今霄その長が
家ハいゝきて彼と遊びあゝさゝとひゝりごち。俄頃ハ衣紋ゝい
繕ひ湊を望ていそぎしゝ。風流の弥ハ係るゝべし。

三國一夜物語巻之五畢

壁中